

Vol.10 建築の解放を提唱したヨーゼフ・フランク

三谷 克人 (建築家、ウィーン在住)



三谷 克人 (みたに・かつひと)

1950年大阪府生まれ。1975年京都大学建築学科卒業。1979年渡米。ウィーン工大在籍のかたわら設計事務所勤務。1992年コンペー等入選を機に独立。以降「TRANSPOLIS」を主宰、現地の建築家の職能を遂行中。日本での客員講演多数。オーストリア建築家中央連合会会員。

ウィーン工科大学の才能たち

オットー・ワグナーが近代建築を説いたウィーン美術アカデミー。しかし、近代建築のグローバルな展開により大きな意味をもつ建築家たちは、ウィーン工科大学から輩出したのだった。たとえば第一次大戦後、建設ボリュームの落ち込んだ故郷を去ってアメリカに移住した、リチャード・ノイトラとルドルフ・シンドラー。F・L・ライトの下で働いたこともあり、2人は日本でもポピュラーな存在だが、その建築的素養がウィーンで培われたことを、忘れてはならない。また近いところでは、『建築家なしの建築』で知られるベルナルト・ルドフスキーがいる。彼もウィーン、ハイレベルな建築的雰囲気学んだのだった。

そしてもう1人、当地に留まり、その連続性の中で建築と近代とを根本から問い直した建築家があった。ヨーゼフ・フランク (1885-1967) だ。彼は1931年、自著『シンボルとしての建築』によって、近代造形運動が内包する人間疎外の行く末を見据え、早々と警鐘を鳴らす。今からすれば先見の明だが、当時はモダンに水を注す変わり者として、総スカンを喰らった。だからだろう、日本ではフランクの翻訳本は見つからない。

ヨーゼフ・フランクの先進性

若きフランクは、カフェ・ムゼウムのロースの常連席に着くことを許され、同時にヨーゼフ・ホフマンと家具で協働するという、稀有な位置にいた。影響を受けて当然だったが、立場や主張の差異を越え、2人の真摯な追求の姿勢に感化される。もう1つ彼を支えたのは、ウィーン工科大学で古典建築を担当した教授カール・ケーニッヒの教えだった。

建築は古来、時代精神のシンボルたる様式に即して構築されてきたわけだが、19世紀の様式が恣意的なスタイル・ブックに変質し、内実を喪失した。そして20世紀、その無の地平に古典の原則を踏まえ、進展する技術の可能性を用いて、新しい建築のあり

方を追求すること。この「温故知新」とでもいうべき姿勢が、ウィーン建築的発想の底流に存在することは、まだよく認知されていない。フランクは、今日的な「デザイン」が大量消費を煽るための「メイク (化粧)」であることを、早くから見抜いていた。モダン・デザインが持て囃されてファシズムのように社会に浸透し、タイプとして完成したものにも、不要なデザインが押し付けられる。それは19世紀の様式主義と同じように、後退を意味するのではないか。あろうことにもフランクは、そういう循環を加速させるシステムとしての近代に、「もの申し」たのだった。

2つの住宅展覧会とフランク

大戦の疲弊も癒えた1927年、住宅を近代建築の課題として展示するモデル街区が、南西ドイツのヴァイセンホフに出現した。「ノイエス・パウエン」(新しい建設作法) という表題のもと、建築家ミーヌの掛け声で、当時の最先端とされた建築家たちが作品を提示する。そうして実験的住宅が建ち並んだが、オーストリアの建築家フランクは、そういった趨勢にアンチを表明。居心地の良さこそが近代人の必要とするもの、という考えに基づいて、一見普通の住戸を提案した。

彼はただ、職人が時と共に完成させた雛形を、機械生産の利便のために直線に還元してしまう、モダン・デザインの弊害を、指摘したのだった。フランクの言い分は、『情緒のための仮面舞踏会とその問題』という一文に詳しい。しかし、近代派は大憤慨。絨毯やテキスタイルを使ったインテリアを、彼らが「フランクの売春窟」と評論したという話もあるほどだった。以来、フランクの名は出展者リストにしか載らないようだ。

そのフランクが1932年、今度はウィーンに別の建築家達を招待して、独自の住宅展覧会を実現する。テーマは、狭小な敷地を有効利用して、経済的で住み心地の良い住宅を実現すること。当時のウィーンの状態に合った企画であったが、知る者は少ない。



①ベア邸 (1930)、二階分の高さをもつ居間の見返し、ヨーゼフ・フランク ②ベア邸主要階平面図 ③家具配置のスタディー、ヨーゼフ・フランク ④壁紙のデザイン・手描き下絵、ヨーゼフ・フランク
⑤論説に加えられた挿絵、ヨーゼフ・フランク:「モダンな椅子に必要な部分は2/3で、残りの1/3は装飾だ」 ⑥独自設計による多様な椅子、ヨーゼフ・フランク:フランクは施主により、cm単位でサイズを変更した。
⑦古代エジプト風腰掛け、ヨーゼフ・フランク:エジプト文明はセムパー以来、ウィーンで高く評価されている。
⑧ベア邸 (1930)、読書コーナー、ヨーゼフ・フランク ⑨ベア邸 (1930)、隣接する空間より居間を望む、ヨーゼフ・フランクフラ
⑩ベア邸 (1930)、階段踊り場より居間を望む、ヨーゼフ・フランク:ガラスで庭に張り出したコーナー、庭への出口はドアで意図的に一つ。
出典:①⑧⑨⑩筆者撮影 ②⑤筆者アーカイブ ③④⑥⑦フランク展MAK Wien、筆者撮影

街路と広場から成る住宅

これは、1930年にウィーンに竣工したベア邸 (Villa Beer) の解説に与えられた表題で、こう始まる。「モダンな住まいは、ポヘミアンであるアーティストがマンサードの屋根裏に構えた、アトリエのようにあるべきだ」。小屋組みや煙突を避けながら設えられた、ちょっとした段差や並外れた天井高と大きな窓などが醸し出す、空間の多様性。ここでは、その多様さを自然発生的に演出することが、建築家の仕事となる。日本庭園にも通じる価値観だ。「巧みに構成された住宅は、街路や小路の結節点から少し外れたところに、人の立ち止まる場所が用意された、街区に比すことができる。」世紀末のウィーンで外部空間を論じたカミロ・シッテが、見え隠れする。

フランクはまた、階段を巡る作法も伝授してくれる。先へ進むベクトルを常に維持すべきこと、到着したことを知覚させること、プライベートの必要な階へは独自の階段を設けること、方向変換は空間体験を主眼に計画

すべきことなどが、最も大切なのは、導かれていることを当事者が気付かないこと。

この住宅では、ロースのラウムプランの教条的性格が、ゲムユートリッヒ・カイト (えも言われぬ心地よさ) に昇華されている。本を片手に午後のまどろみに誘う読書スペース。気になるファサードの丸窓が必然であることがよく解る。神経質なオブジェなんか、なくても良い。写真から何とか、ご理解いただければ幸いだ。

古典を尊重するウィーンのモダン

フランクは1933年、ユダヤ人排斥が強まるウィーンを後に、妻の故国スウェーデンに移住した。そこでテキスタイルと家具のデザインに従事して、インテリア業界に大きく貢献したのだが、ネットはそれしか報じないから、今日では彼をデザイナーとみなす向きもあるようだ。

だが、断じて糺しておく。フランクこそが、ウィーン建築を正當に理解するための、ミッシング・リンクなのだ。

ウィーンの正当評価の必要性

フランクの存在は今のところ、まだ伏せられたままで。それは、ロースの本意を無視して近代展開を牽引する役割を与え、彼の古典尊重を情報操作で隠蔽する、という構造にも似ている。それを知ってか知らずか、現代建築の閉塞が嘆かれてきた。いや、それもたぶん過去だろう。建築が社会から遊離し始めて、もう久しい。それを、放っておいて良いのか?

今こそ、ヨーゼフ・フランクを発見すべきだ。彼には、ウィーンにおける近代との葛藤が集積していて、別の文脈での近代認識が可能になるが、フランクへの距離は大きくない。今からでも、遅くはない。

これで主論は完結するのだが、ここで手に入れたものを道具として、我々が祀り上げてしまった建築家を眺めるとどうだろう? 論が尽くされた感はあるが、新しい側面が浮かび上がってくるかもしれない。たとえば村野藤吾の場合、どうだろう。(つづく)



ベア邸 (1930)、アプローチ外観、ヨーゼフ・フランク (筆者撮影)
:正面は勝手口、メインの入口はピロティの下。低く抑えたのは、居間の開放感を高めるための演出。